

産学連携学会

ニュースレター

03



この度、第3期産学連携学会の会長を仰せ付かり、大変光栄と共に、大きな責任を感じております。本学会の設立にご尽力された湯本元会長、荒磯前会長、産学連携学会に熱い思いの多くの方々の意思を汲み、微力ではありますが、本学会の益々の発展に貢献いたします。

産学連携学会も5年目を迎え、会員間の連携も進み、年ごとに多くの会員による研究発表が行われ、日本における産学連携活動状況や産学連携の学問的体系も確立されつつある状況になってきております。更なる、学会の発展に、会員の皆様方に産学連携学や会員の産学連携活動を自由に討論する場や環境を提供し、日本の産学連携の発展に尽くしてまいります。

今期の目標として、

- ①産学連携学会の組織と活動の強化
- ②産学連携学の確立
- ③地方活動強化に向けた支部設立
- ④地域の産学連携部門と連携した学会活動活性化
- ⑤研究会活動の強化 など

を掲げ、活発な活動を進めてまいります。

これらの目標達成には、会員皆様のご協力とご理解が必要不可欠であり、会員皆様方の活発な活動こそが本会を発展させ、本学会が揺るぎない社会的地位を獲得するものと考えています。

今期学会の運営等を中心となって活動していただける第3期役員および委員の方々をご紹介します（本紙4面を参照下さい）。体制構築には、組織を簡素化し、実務的活動を重視しております。学会運営では、学会の重要案件は、理事会、総会によりますが、実質的運営を会長、副会長を軸として行い、学会活動では委員会を中心とした体制で進めることとしております。

本学会の中核となる運営組織、委員会、学会支援者を下記にご紹介いたします。

実務的活動を立案・立案し、実施していただく委員会には、1) 学術委員会、2) 総務委員会、3) 事業委員会、4) 学問体系設計委員会および出版委員会を設置しました。また、学会の運営に直接参加しませんが、支援者、相談役として、学会顧問を新設し、さらなる学会の発展にご尽力をいただくこととしました。さらに、学会への幅広いご意見をお伺いし、運営に反映させるため、会長の諮問機関として会長顧問を今期期間中設置することとしました。

以上のような体制で今期学会を運営させていただきます。

会員皆様方のご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(さたけ・ひろむ/徳島大学 教授 知的財産本部 副本部長)

(写真：荒磯前会長（右端）より紹介を受ける佐竹新会長（右より二人目）。第5回大会での総会にて。)



第5回産学連携学会大会を終えて

実行委員長 足立和成

6月28日と29日の2日、山形県米沢市の「伝国の杜」で行われた産学連携学会第5回大会も無事終わりました。私自身は、3月に山形県庁への出向が決まり、4月からは米沢の研究室に12人もの学生を残したまま、米沢市の自宅と山形市の県庁との間（48 km）をほぼ毎日自家用車で通勤する生活を送ることになってしまっていたため、実行委員長とは名ばかりの「何にも」実行「せん」委員長になってしまっており、そのため、研究室の学生さんたちを含む周囲の皆さんにはかなりご迷惑をおかけしました。特に本学地域共同研究センターの保科園子さんには、当初大会窓口の仕事は一切合財お願いしっぱなしで、本当に申し訳ありませんでした。

ただ幸いにも、副実行委員長である地域共同研究センター教授の小野浩幸先生を中心に、山形大学の職員を主力にした実行委員会の皆さんがご尽力下さったおかげで、その参加者は大会事務局関係者を除いて202名（懇親会は120名）を数え、発表件数も実数で100件近くに及んで、大会は盛会となりました。米沢のような交通の不便なところにもかかわらず、北海道や九州、四国からも何人もの方が参加して頂いたことは、名実ともに産学連携学会が社会的に認知されるようになってきた証左かもしれないと考えております（牛肉とサクランボの魅力だけのせいにはされたくありません。まあ、それもあるかもしれませんが。）。「良い大会だった。」とのお褒め言葉も何人かの参加者の方から直接頂きました。短期間とは言え、少なからぬ人達に山形、米沢、そして山形大学への関心を持って頂いたことは、大変嬉しかったです。山形大学の総合力の一端を、多くの皆さんに実感して頂いたのではないのでしょうか。今後とも会員の皆さんの産学連携学会への積極的な参加をお願い申し上げます。

最後に、この大会を成功に導いて頂いた大勢の参加者の皆さん、実行委員会の皆さん、アルバイトの学生さんたち、地域の皆さん、荒磯恒久前会長を中心とする学会役員の皆さん（わけても、複雑な講演プログラム作成の大部分を引き受けて頂いた大分大学の伊藤正実先生には、もう足を向けて眠れません。）には、心から御礼を申し上げます。

本当に有難う御座いました。足立は実に幸運な実行委員長でした。

（あだち・かずなり／山形大学 教授）

産学連携学会第5回大会

実行委員報告

第5回大会を無事開催できましたことに感謝を、第6回大会にエールを！

副実行委員長 小野浩幸

6月28日、29日の2日間にわたって開催された産学連携学会第5回大会を何とか無事終えることができましたことに、学会理事の方々をはじめ、多くの共催・後援・協賛団体の皆様、そして遠く米沢まで足を運び熱い議論を重ねていただいた数多くの参加者の皆様にまずは深く感謝申し上げます。

大会の登録参加者数は、事前登録174名、当日登録28名の計202名で、講演・シンポジウム等の招待者、展示ブース参加関係者などを合わせますと約250名という数になりました。学会員以外の一般参加の方々の参加も多く、産学連携学会が仲間内の研鑽の場から「産学連携の志を共有する公の器」に成長・発展しつつあるのではないかと感じます。一般講演では、席が足りなくて立ち見参加や部屋に入りきれない人がでるセッションも多く見受けられるなど、内容的にも熱のこもったものとなったように思います。

A会場である大ホールでは、特別講演、シンポジウム、パネル討論会、特別セッションといった企画が行われましたが、いずれも「地域イノベーション」がテーマにとりあげられ、様々な角度から議論が行われました。「地域」で開催された今大会において、このことは非常に意義深いことだったと感じます。また、B、C、Dの3会場で行われましたセッションでも、従来から議論されてきた重要なテーマに加え、「海外展開」、「国際連携」やリレーショナルシップバンキングに伴う「学金連携」などタイムリーなテーマのセッションも多くなり充実した内容であったと思います。

一方、振り返ってみますと反省すべき点も多くありました。学会理事の方々からは、かなり早くから大会準備に関する種々のご助言をいただいておりますが、産官学を広く巻き込んだこのような学会の開催は、開催地として初めてで不慣れなことから開催準備に際しまして多くのご迷惑をおかけしてしまいました。実行委員会として理事会と密接な連携を図りながら、もっと早くから共催、後援などの諸団体との調整と、それに伴う予算等の大会フレームの作成については、体制を組んで動くことによりもっと円滑に進めることができたのではないかと思います。

個人的には大会3ヶ月前に手術入院するなどアクシデントに見舞われ、多くの方々に大変なご迷惑をおかけしました。このような中、かくも盛況に大会を終了させていただいたのは、ひとえに学会理事の方々のお力添えと実行委員会のメンバーの身を粉にする奮闘の賜物だったと思います。私たち大学内でリエゾンを担当する者は、学内の事務職員スタッフに支えられて仕事をさせてもらっています。そのことを改めて実感させられたという点で、及ばずながら副実行委員長の重責を務めさせていただいた私にとって今大会の運営は実り多いものだったと感じています。

今回は、産学連携学会の重鎮でありベテランの伊藤正実先生の居られる大分大学です。今大会をはるかに超えた素晴らしい大会となることを確信いたしつつ、開催の成功を御祈念申し上げます。

(おの・ひろゆき／山形大学 教授 地域共同研究センター 副センター長)



1		8
2	7	
3		9
4		
5		
6		

- 1 会場の米沢市内の「伝国の杜」。
- 2 エントランス空間にはポスター・セッション会場が設置された。
- 3 B会場講演会風景。
- 4 C会場講演会風景。
- 5 D会場講演会風景。
- 6 交流会での荒磯前会長の挨拶—
“産学官 集めて強し 山形県”
- 7 シンポジウム「産学連携の国際展開と地域」風景。左より司会の小野浩幸氏、パネラーの城戸淳二氏、久保浩三氏、黄瑞耀氏、鈴木布佐人氏。
- 8 ポスター・セッション風景。
- 9 J R米沢駅構内に設置された有機ELによる照明装置の広報施設。

